

2017年度15のまなび（1回から5回の合宿バージョン）の記録

家族が分断され、子育ての知恵を世代から世代へ伝えていけなくなった現代。子育ての方法が分からないまま初めてわが子を抱く母親も多く、乳幼児への虐待のニュースはあとを絶たない。「親子を取り巻く環境が大きく変化するいま、本当に必要な子育て支援とは何か」。支援現場では、模索が続く。そのなかで、「人が育つ」ことの原点に立ち返って問い直す動きが、京都から広がっている。発足5年を迎えた「子育ての文化研究所」。支援者を対象に、子どもの育ちに関わるあらゆるテーマで講座の開催を続けてきた専門家集団だ。

7月1日と2日には、京都府宇治市の旅館で初めての合宿型講座「京都で学ぼう語ろう2017・15の学び～人の一生の始まりの環境をつくる」が開催された。参加した支援者ら60名（54名と関係者の挨拶やスタッフなど）が講義を聞き、日頃現場で持っている違和感や疑問、焦り、不安をぶつけ合った。そこでは、子育て支援の課題は単純ではなく、多くの問題が絡み合っている実態も垣間見えた。

決して正解を求めるのではなく、「わが子を見て、わが子に向き合う」大切さを確認し、それを「教える」のではなく、母親たちと一緒に「探していく」姿勢。そこには、教科書にも専門書にもない生の姿を見て、生の声に耳を傾け、「いまここ」に生きる親子のいのちに寄り添い試行錯誤する、支援者らの姿があった。

手探りのスタート

「たくさんの情報がネットで検索できるような世の中。私たちは、何をセクションして何を伝えればいいのか。考えれば考えるほど深みに入って行って、ようやく、こういうことを伝えたらいいんじゃないかとわかってきた。けれど、まだ進化途中です」

合宿の冒頭、迫きよみさんの挨拶に、参加者は耳を傾けた。メモを取る人、じっと前を見ている人、配られたテキストを開く人。支援者が集った会場は、「学びたい」という熱気に溢れていた。

全国から集い、緩やかなネットワークを作り始めている支援者たち。一人ひとりのエネルギーが結合したその「場」からは、大きなうねりへと繋がる熱気が感じられた。

だが、ここに至るまでの研究所の活動は、模索の連続だった。

居場所だけでいいのか

「子育て支援のための居場所が次々にできているけれど、ただ居場所を作っているだけでいいのかな」

代表の朱まり子さんと事務局の迫きよみさんの2人が、支援者の役割に疑問を持ち一念発起したのは5年前。始まりは、子育てサークルの活動やイベント、広場に集う母親と子どもとの関係が気にかかったことだった。

当時は、各自治体の子育て広場などの開設に力を入れていた。次々に生まれる「居場所」。だが、そこに集う親子の異変に、2人は気づき始めていた。

グッズ選びに一生懸命な一方で、赤ちゃんに話しかけないお母さん。関係がうまく作れていない母子。正解を求め、わが子を見ず、ネットの情報を鵜呑みにしているお母さん。笑わない赤ちゃん……。

「なぜ、こんなことになっているのか。今の子育ての現場に何が起きているのか。そして、私たちは、何を伝えていかないといけないのか」

2人は、考えた。

気づけば、たくさんの情報がネットで検索できるような世の中になっていた。「何を伝えるか、考えれば考えるほど深みに入っていった」（迫さん）。

乳幼児の虐待があとを絶たず、子どもの育ちは待たなし。時間はない。京都の支援者に呼びかけ、手探りの中で、研究所を設立。「支援力」を上げていくために何が必要か、走りながら考えよう-との思いで、理学療法士や臨床心理士ら、様々な専門家を招いた連続講座を企画した。

方法論やグッズじゃない

立ち上げた当初、抱っこやおんぶで赤ちゃんの育ちを支えたいとの思いで研究していた迫さんは、「どのような方法が良いのか、どの道具が良いのか」と、育児グッズの良し悪しを意識していた。

流行し始めた外国製の抱っこひものことは、特に気になっていた。小柄な日本人の体に合わない上、赤ちゃんの体をしっかりサポートできない抱っこひもを「最初の頃は、『敵』だと思っていた」と打ち明ける。「これが広まってしまうと、日本の子どもはだめになると本気で思っていました」

だが、「いくら突き詰めても答えは見つからない」ということに気づく。「小柄な人、大柄な人、スポーツを頑張っていて力のある人、力のない人などいろいろな人がいる中で、どれが良いなんて言えない」

ネット検索すると、両極端な情報が出てくる現実がある。「私たち支援者が、『これが良い』と言ってしまうと、また子どもや自分の状況を考えずに、そこにはまってしまうお母さんも出てきてしまうのではないか」

人間はどのように育ち、どのように生きていくのが良いのか。グッズや方法論ではなく、動物としての本質のようなところに落とし込みたかった。だが、赤ちゃんの育ちに関して文献を探しても、何が本質なのか、どこにも書いていない。

それは、家庭や地域で育まれてきた分野だから、だった。

「自分が子育てをされていて良かったので次に伝わった、そしてまた次に伝えていく、という感じで人から人へ伝わってきたんですね」。それがなぜ伝承されなくなってしまったのか。現場で話を聞くなかで、「母子関係の変化もあるのかもしれない」と迫さんは気付いた。

「お母さんとおばあちゃん世代のつながりも、難しくなっているのだ」と。

誰にも教えてもらえないお母さんたちに、広く伝えていけるものを。赤ちゃんが生まれてから1歳までの間に知っておきたい大切なことをギュッと詰め込んだ冊子「AKAGO」を2016年につくり、新しい一歩を踏み出した。

引き出しを増やす

「AKAGO」の作成と並行して、これまでの5年で計●回の講座を開いてきた。その内容は、抱っこ講座から愛着研究、皮膚と脳の関係性、コミュニティのあり方まで多岐にのぼる。主な対象として意識してきたのは、生まれてから1歳になるまでの親子に関わる支援者。

「とにかく、1歳までの部分をサポートすれば、少しは子育てが楽になるはずだ」と考えてきた。

今回、5年目にして初めて開いた合宿講座。そこには、「支援者一人ひとりに、たくさんの視点と引き出しを持っていてもらいたい」というスタッフの思いが込められていた。

現代の子育ての問題は、複雑に絡み合い、一つの視点だけでは「何に困っているのか」を見立てることが難しくなっている。たくさん講座を開き、それぞれに関心のある分野を選択して単発で講座に参加してもらっても、多角的に問題を捉えてもらうことはできない、ということに、気づき始めていた。

子どもの身体の発達に不安を覚えるお母さんが、実は、コミュニケーションの取り方がわからず、必要な運動につながっていなかったり、自身と親との関係にしんどかった経験があったり、子育てに自信がなかったり。身体だけを見る、気持ちだけを見る、ということだけでは、発見できない問題が、たくさん隠されていることがあった。

「ときに、問題の背景に想像もできない原因がある。目の前のお母さんが抱えている困りごとの本質を見立てることが、子育て支援者の役割」。朱さんはそう語る。

多角的に見る

2日間の合宿では、研究所のスタッフのほか、理学療法士、わらべうたの伝承者、大学教授らが、子どもと親を見るとき大切な視点や、課題がある人にアプローチするときの方法などを、これまでの経験や専門的な見地から解説した。

「不安な気持ちは当たり前。不快な感情は自分で処理できるように、親も子も、現実と理想との葛藤に耐える力を自分でつけられるように」と語り、親自身も「わが子の不快な感情」に耐性をつけて向き合えるよう親を支える人の存在の必要性を説いた研究所副代表で臨床心理士の馬見塚珠生さん。

「子どもたちは、知りたい、遊びたい、という欲求から、運動を獲得し、体の感覚を覚えていく」ことや、「赤ちゃんの行動を実況中継することで自己認知や動作の定着が図れる」ことなど運動とコミュニケーションの関わりを具体的な事例を交えて解説した、理学療法士の中原規予さん。

人を知り、五感を育て、聞く力や話す力を育てる「人育ての教育プログラム」であった遠野のわらべうたを紹介し、赤ちゃんとの対話の実践を伝授した木津陽子さん。

それぞれの講義には、古くて新しい知恵、時代に適合する斬新な視点やヒントが溢れていた。

迫さんは、一本紐を使ったおんぶの方法を「これだけは習得して欲しい」と紹介。その一方で、「抱っこを教えて欲しいと来られるお母さんが、実は、実母との関係に悩んでいることを涙ながらに打ち明けるような例もある。おんぶや抱っこは、きっかけにすぎない。本当の困りごとをキャッチできるか、それが大切」と語りかけた。

参加者は、自分たちがもともと「知りたい」と思っていた興味関心の枠を超え、学んでいた。「これまでに持っていなかった考え方だ」と、新しい発見をする人もいた。

「視点やアプローチの方法が多ければ多いほど、親子が等身大で自分たちに合う子育てにたどり着くための選択肢が増える。救われる親子が増えるはず」。そんな朱さんと迫さんの狙いは、奏功した。

本当に必要な支援

「いま、子育て支援の現場で何が起きているのか」

合宿は、参加者の生の声から実態を紐解く場にもなっていた。

1日目の夜。専門家らの講義をひと通り聞いた参加者たちは、大きな模造紙に、付箋を貼り付けた。

「普段、課題に思っていることを教えてください」「何を求めてここに来ましたか」。臨床心理士で武蔵大教授の武田信子さんの問いかけに対し、それぞれの思いを記していく作業

だった。

「ママのスマホ依存」「親自身が抱える母子関係」「子どもの発達格差」「気になる家庭へのアプローチ法」……。ある人は、すらすらと何枚も、ある人はじっくりと頭をひねりながら、日頃の思いを綴っていた。

2日目に講座を持つことが決まっていた武田さん。だが、あえて内容を準備せずに会場を訪れた。支援者の生の声を聞き、見えてくる実態や課題をベースにしなが、翌日の講座を作り上げていこうと決めていたのだ。

2日目。武田さんの手によって整理された「声」たちが、紹介された。

「普段課題に思っていること」。その内容は、多岐にわたった。

▽発達の異変やゲーム漬け、スマホ依存、体力の低下など子どもの課題▽その子どもの発達に対する養育者や支援者側の危機感のなさ▽支援者同士の共通認識の難しさ▽ピンポイントの正解を求めがち、子どもについての知識のなさ、祖父母との親子関係の不安定さなど養育者側の異変▽気になる親子へのアプローチ、行政の理解を得る難しさなど支援者側の問題▽働き方の問題やバックグラウンドとしての社会の課題-

多数の要因が絡み合っている現状が、浮き彫りになった。

「大切なのは、視る目を持つ・聴く耳を持つ・伝える口を持つ・触れ合う手を持つ、ということ。まず、私たちが、それらに気づく必要がある。その上で、養育者たちに広げていく」。武田さんは、支援者自身の「気づき」の重要性を説いた。

そして、会場に問いかけた。

「親がピンポイントで正解を求めがち、マニュアル育児、などがあるけれど、支援者自身も、正解を求めていますか？ 具体的なハウツーを知りたいとか、プロフェッショナルになりたいとか、おんぶ抱っこの方法がわかるようになりたいと思いませんか？」

会場からは、苦笑が漏れた。

ニーズに応えられる支援者でありたい、と思うことは、自然の心理。だが、武田さんは、こう続けた。

「どうすれば良いのか養育者に教えられないとき、『もっと何かしなければ』と講習会に参加する。そこで、周りが自分よりもたくさん知っていれば、『もっと専門的に学ばなければ』と頑張ろうとする。でも、本当に必要な支援とは、何でしょうか」

ここで投げかけたのは、「『子育て支援者』がつけるべき力とは何か」という問いだった。

「私たちは、子育てを支えていく、という仕事をするプロ。専門知識を身につけて資格を取るのも良いけれど、それが『子育て支援のプロ』ではない」

では、どうすればよいのか。「それを一緒に学び合うのかこの場である」と語りかけ、参加者たちとともに、現場で起きている最先端の情報を共有しながら本当に求められている支援の本質を探っていくことを確認しあった。

助産師や保健師、子育て支援団体の代表、体の専門家、体育教室の講師、ボディサロンの経営者、あらゆる分野で活躍している参加者が、自分たちの気づきや思いを語り、行政に予

算をつけてもらうための工夫、活動を広げていくために知恵を絞った経験などを、参加者と共有した。

自分にできることを

「私たちが伝えるのは、手法ではなくマインドなんだと改めて心に刻みました。赤ちゃんの目を見て呼びかける、一人の人として尊重する姿勢を大切に、実践していきます」「ここに集まっている方たちは、どうやったら、ママやベビいちゃんが本来もつ力を発揮してもらえるのかを懸命に考え、行動されている方たちばかり。そのためには、適切な知識が必要、技も必要と研鑽されてきているんだと実感しました」「正直、私の中で母子支援をしている人たちは『こうしなさい』『あしなさい』と自分の正義を提示する人たち、とイメージでした。今回集まれた人たちには、相手の主体性をいかに高めるか、を考えている人たちばかりで、なんだか自分のイメージの狭さを恥じ入る感じでした。とてもうれしかったです」「アプローチの方法は違っても、子どもの主体性を育てるための声かけや見守りといった共通する視点があるのに、改めて気付きました。このあたりが主幹なんだろうなど、枝葉の細かいことは、ぬけたとしても主幹がなにかを共有できればいいのではと思いました」

学びを終えた参加者の感想は、それぞれに新しい発見があったことを示していた。

また、それぞれに、自分のできることをやっといこうという決意が見て取れる声もあった。

「私にもできることがある、と思えた。地元で、私がここでできることを精一杯していきたい。2020年には、日本を動かす一人に」「これからこの感動を、地元で、どう還元していこうかな？ あれこれアイデアがポコポコ」「私にできることを探しに行った今回の合宿。強い想いはあるけれど、形にできるパワーのない自分。でも見つかった。私にできそうなこと」

「自分もできそう」という小さなヒントがいくつも散りばめられ、その中から、一つでも二つでも拾って地域で実践する。そんな動きに繋がる芽も感じられた。

「大きな手」になる

「子育ては母親の責任」とされる風潮はまだまだ強く、家族回帰を促す流れもある。「わからない」「助けて」と言えずに、人知れず悩み、笑顔の裏に本音を隠している母親もいる。

合宿で支援者らの熱意に触れるなかで、これまでの取材で出会った母親たちの涙が、脳裏をよぎった。

「子育てサークルに参加していても、キラキラした部分しか見せられない」「自分が間違っていると思いたくない」「できない自分をさらけ出せない」。彼女たちの心には、どこかに、

「良い母親にならなければ」「子育ての『正解』に近づかなければ」という呪縛があった。

合宿で冒頭に話した馬身塚さんは、京都大霊長類研究所の言葉を引用した。「人間の赤ちゃんは、仰向けに寝る。それは、多くの人に覗き込んでもらってあやしてもらうため。多くの人が語りかけ、関わり、成長することで人は生き延び、進化を遂げることができた。もともと私たちはそのようにできていたのだ」と。それが日常生活の中でできなくなってしまったいま、子どもたちに支える手が要るように、お母さんにも支える手が要る。

「私たち支援者は、お母さんを支える大きな手になりたい」

合宿後、朱さんはあらためて思いを語った。地域を超え、分野を超え、緩やかなネットワークを結びながら、育てる人と育つ人を支える「大きな手」。家族だけでは限界があるのだと気づき、そして、生み育てる人たちとの対話によって皆で「育ち」を支える動きが、各地でつくられ、つながってゆく。机上の空論ではない、地に足のついた新しい支援のかたちが、この「始まりの場」から見えてきた。

(ライター 小坂綾子)

小坂綾子(こさか・あやこ) 1974 年生まれ、京都府出身。同志社大学法学部卒業後、京都新聞社に入社。記者として取材活動をする一方、2005 年と 2009 年に女兒を出産。母親としての視点を生かしながら、南部支社や文化部生活班などで子どもや女性、働き方の問題を追い、子育ての文化研究所の立ち上げ時から取材。2017 年 4 月に退社してフリーランスとなり、執筆活動を続けている。

不快に耐えられる力を

馬見塚珠代さん（臨床心理士・子育ての文化研究所副代表）

子どもの持つ自然治癒力が引き出されるベースが愛着。子育てで最初に一番大切なことは、この安心をいかに与えて子どもが回復できるように援助するか。

子どもがぐずっていると親は焦るけれど、子どもが嫌な気持ちを親に抱えてもらって落ち着かせてもらう。イヤイヤで荒れてしまっても、抱えてもらうことで安心感をもらい、不快な感情も自分でなんとかできる、と教えていく。子どもが自分の些細な不快感、不安感を抱えきれないのは、親である大人が自分のことに精一杯で子どもの不快な感情に耐えられないから。

この時一番大事なことは、子どもが不快になっていることに気づき、親がそれに応えようとしているかどうか、気持ちを感じてあげているのかどうか。世の中が便利になり過ぎ、親自身も不快感に耐えること、耐性が低くなり、育まれる機会が減っているのではないか。

赤ちゃんは不快感が出ると泣く。おっぱいをあげたり抱っこしてあげたりすることで不快感が沈静化されるけれど、どうして良いのかわからずスマホで動画を見せると赤ちゃんは不快な感情を自分で処理しきれないまま、それでも動画が目々らしいのでとりあえず泣きやむ。その動作ばかり続けていると、それが欲しくてさらに泣き、堂々巡り。それが将来的に色々なものへの依存につながるのではと、専門家たちには懸念がある。

親自身が耐える力を、子育てを通して持ってもらうには、それを支えてくれる人が必要。ネットワークが不足している。本来、赤ちゃんが自然に持っている「関わりたい力」や、「自分でよくなりたい力」を伸ばしてあげるには、たくさんの人が関わっていく子育てを、今の時代に合わせて持つことが大事で、そこが原点。

一緒に手がかりを探す

谷口英子さん（子育ての文化研究所）

子育てには色々なメソッドや〇〇流という手技手法、考え方の理論などが出回っている。それしかないと思ってしまうと、〇〇流で子どもと接してしまって、全く子どもを見ていない状況になる。〇〇メソッドに沿ってしまうと、目の前の子どもの表情より、テキストで比べて子どもの表情がどうなのか考え、「軸」が違ってきてしまう。

今を生きる私たちの生の営みは、連綿と続く人類の歴史の上にある。いくら情報に流されていても、生命に維持装置の中には本当はつながりがほしいと思っているし、お母さんの奥底には本当は「この子を見ていきたい」という心があるはず。

「この方法がよい」という方法論の枝葉に近いものだけを並べるのではなく、できるだけ

本質に近い、そしてその人の「自分の本質」に似ていて実践できそうだと感じてもらえるようなアプローチを選んでくれる、その「選び」を応援していきたい。教科書通りにしたり、私たち支援者のアドバイス通りにしたりするのではなく、自分自身が育ってきた記憶、自分の奥底にある記憶もつなぎながら、目の前の子どもの育ちを見るやり方もある。

教えてくれた人、ではなく、寄り添ってくれた人になり、試行錯誤しながら、一緒に手がかりを探したい。

運動発達にも大切な「関わり」

中原規予さん（理学療法士）

親子関係ができていないケースを見ると、愛着形成が構築されなければ養育に結びつかず、生活も成り立たなくなるとわかり、発達以前に子育て支援の大切さを感じる。

母親は、自分のお腹から赤ちゃんが出てくると、自分と同じように考えていると感じてしまうが、自分とは全く違う人で、考え方も違う。大人が赤ちゃんを「人」として認め、どんな子であっても大人に話すように合理的に説明することが大事。

赤ちゃんには生まれながらにして「生きたい」「知りたい」「仲間になりたい」という欲求がある。だが健診でひっかかる子の中には、「知りたい」という探求心の少ない子が多く、それは「泣けばお母さんが何か持ってきてくれる」という環境が起因している。「どのように欲求を引き出すのか」が大事。

乳児期は、自分の体を使って色々な姿勢を取るのも遊びの一つ。幼児期になると、遊びの中で人とのやりとりを学ぶのが自然。子どもは、自分が見たものをすぐ記憶せず、真似て体験したり遊んだりして行動を理解し、記憶を定着させる。

言語の発達には、耳からたくさん入れることが大切。体の発達も、やりとりがうまくできなければ進まない。「どうしたいのか」を喃語であっても話し、手を出すのではなく「実況中継」のように声をかける。「もうちょっとで届いたのにね」「このおもちゃ欲しかったんだね」など見たまま言葉にすることで、今自分が何をしていたのかイメージが湧き、動作の定着や母子の関係性などの要素にもつながっていく。

また、同じ動作を通じてものごとを共有して育つ脳がある。母子で小さい時から共有することで、成長後もものごとを共有できる関係につながる。一緒に外に出て草の上に座って花を見つけるなどができて初めて次の発達「自己認知」へとつながるため、「共同注視」は重要。

生活の模倣が出てくればどんどんやらせる。洗濯物が入ったカゴを持ってもらう、同じ靴下を探してもらうなど、頭や体を使うお手伝いを遊びとしてやってもらうと運動負荷としても高く、色々な能力が育つ。

お母さんが子どもの問題に気づいていない場合は直接言わず、お母さん自身が気付くように、その動作をやらせたり、一緒に観察する時間を作ったりする方法もある。お母さんを追い詰めないように。

わらべうたは「人育て」

木津陽子さん（遠野のわらべうた）

愛情を持って子どもを育てれば育児書通りに育つと思っていたのに、わが子が生まれてみれば、同じ月齢の子どもと違い、夜泣きもひどかった。自信が持てず、自分の子育ての何が悪いのか、お祓いにいあった方が良いのかなどと考えた。原因を突き詰めようとするのは、自分を追い詰めることになってしまうのかもしれない。けれど、わらべうたに出会って、子育てが楽しくなり、視界が広がった。

「遠野のわらべうた」は、生まれてから13歳前後まで人として大切なことを遊びながら身につけさせ、体を作り、独立させていく人育ての教育プログラム。人に懐き、表情や仕草などから人を見抜く力を育て、自分に負けない力をつけ、五感を拓く。遊びながら自分の感情をコントロールし、我慢する力を育てる。「教える」のではなく、気付くまで待ち、自分からしたい気持ちが出るまで待つ、という教えがある。身につけることが先で、知識は後。

赤ちゃんのためのわらべうたには「うんこ語り」がある。生まれてすぐは疲れているので、機嫌良くしている時に、同じ言葉で声をかけてあげる。無事生まれてきて、「うんこ語り」で返してくれると最初の安心につながる、と言われている。赤ちゃんの名前を呼び、目が合ったら言葉をかける。

でんでん太鼓の手まねで「てんこ、てんこ、てんこ」、赤ちゃんの手が動くとき「じょうず、じょうず、じょうず」。手をグーパーしながら「にぎ、にぎ、にぎ」、首を左右に振る遊び「かんぶ、かんぶ、かんぶ」など、月齢や体の発達に合わせて遊びを次に進め、気持ちを育てていく。顔を使った遊びで顔がどのようなものか教えたり、にらめっこで「表情」を教えたりもする。遠野では、大人がやってあげる行為は少なく、赤ちゃん自身がやろうとすることを励ますことが多い。

わらべうたには目的と年齢がある。赤ちゃんの時期は、人を感じる、真似っこする、人がいて嬉しい、幸せ、安心だという気持ちを育てる、もともと持っている力を起こしてあげる。そして遊びの中で距離を離れていき、最終的に子どもが人の中で入っていけるように教える。

わらべうた人を恐れず、人に懐き、人を求めていける人を育てようことを目指し、人の一生にわたる生き方を示している。

自分の手や体を使って

迫きよみさん（子育ての文化研究所事務局）

2010年くらいからインターネットが普及し始め、いろいろなものがすぐには買えるようになった。ネットの商品は良いことばかり書かれ、何を買えば良いわからない時代になってしまった。70種類の抱っこ紐やおんぶ紐を買い集めて検討したが、ある人はどれを買ってもダメで、ある人は良かったと言う。グッズが鍵ではなく、お母さん自身の体幹や体験からだと見えてきた。

方法論やグッズにとらわれず健やかに育つ赤ちゃんがいる一方、グッズに走って声かけをしないお母さんは色々な場面で困っていることがある。抱っこする場面では、目を見て語りかけ、呼吸を合わせて抱っこしてほしい。

抱っこやおんぶの講座をするけれど、本当はそこに来られたお母さんが本当に困っていることは何かを見つけて提案できることが目的。講座をやると、来てくれる。そこでお母さんたちには悩みがあることがわかり、少しでも解決できるように話し合った。それは進歩だった。

子どもが自分の意思でおもちゃを取りに行くことや、何かをしたいという欲求が育つことが大切。方法にとらわれすぎると、赤ちゃんとの会話、声かけもなくなってしまう。とにかく赤ちゃんの目を見て話しかけるようにと、ずっと伝えている。

「赤ちゃんの目を見て、赤ちゃんが『抱っこして』と言ってきたらしてあげて」と伝えても、抱っこを求める声がお母さんに聞こえず、抱っこできない人がある。ここができれば次に行けない。ここを教えられるのは支援者。親子関係ができていなければ、受け止めるだけではなくサポートしなければならない。実母との関係が難しく、他人の言葉の方が素直に入ることもある。「昔はそうだった」というのではなく、理論的に、今なぜそれが必要なのかと伝えることが大切。

赤ちゃんが泣いている理由がわからないまま、抱っこやスマホで泣き止ませるよりも、泣いている理由を一緒に考えることが大切だが、実は今のお母さんには難しい。赤ちゃんの泣き声が虐待だと通報されてしまうこともある残念な社会。赤ちゃんは泣くもの。赤ちゃんを気分転換させて心地よくしてあげる知恵と技を、お母さんには身につけてほしい。喋れる口、抱きしめる手がある。道具ではなく、自分の手や体を使ってできることもある。

日常の中に戻せる場を

松田妙子さん（NPO 法人せたがや子育てネット代表理事）

赤ちゃんへの語りかけやあやし方講座をするとき、参加者が日常の中に戻す役割がなければ、一つのイベントで終わってしまう。おんぶや抱っこでも、「上手い」と言って褒める人だけがいても、翌日からやってみて上手くいかないときに広場で練習し合えなければ、ずっと「次はいつか」「どこに行けば習えるか」になってしまう。日常的に練習し合える環境を作りたい。

もう一つ難しいのは、母親学級や母子保健の領域に入り込むこと。プログラムの「売り出し」の言葉を、行政の人にも意味があるように伝えている。

ナンパ術のように街でお母さんに声をかけることもある。「赤ちゃんがひっくり返ってますよ」「苦しそうですよ」などの言葉は、自分も周りに言われて嫌だったので、「大きくなってくると大変ですね」「腰痛めますよね」「重いですよ」と話しかけ、「もう少し赤ちゃんを高い位置にした方が楽かも」と手を出す。その人の「困りごと」を見ながら入り口を作るようにしている。

社会の変化を思考する

武田信子さん（臨床心理士・武蔵大教授）

子どもの発達がおかしくなっているという話があったが、多分今も昔も、弱さや脆弱性を持って私たちは生まれてきている。たとえ弱さを持っていても、自然の中で刺激を受けらるうち、調整され、バランスが取れていく。ずっと快適な中にいると体温調節機能が働かないし、まっすぐな道を歩いていけば、バランス感覚が調整される機会を失う。

290日お腹の中にいてその間いろいろな調整を受け、それでも弱く、生まれてからも調整がずっと続くという風になっていたのが、調整そのものが働かなくなっているのが、今の社会。親に触られる感覚刺激もなくなり、しがみついた時の感覚も身につけないまま育つとどうなるのか。

そう考えると、発達が普通でない子が多数見られるようになってきている。弱さにもレベルがあり、少くくれば、発達障害と診断されても雪の中にはまったり落ち葉に埋もれたりする中で感覚は養われていくし、脳性麻痺でも自然のなかで走り回っているとほとんど普通の子と変わらなくなったりもする。

こんなに数が増えてくるというのは、その「人」よりも、むしろ周りの社会のあり方だろう。そんな中で赤ちゃんが生まれて、どのように育つのか。0歳から1歳の間になどのように

五感を育ててきたのか、ということを考える。五感が育つ刺激がない場所で大きくなると五感は育たない。数十年前と比べて赤ちゃんの身体的・心理的発達、脳がどのように刺激されているのか、話し合っしてほしい。

3、4歳の間までに自分たちの色々な体験があり、その体験に基づき、色々な言葉が自分たちの中にある。両親や兄弟が喋っていた言葉が脳の中に入っている。そして、食べ物も脳を作っている。

教科書に書いてある発達のこと以前に、まず身体的な変化はどうなっているのか。生まれてきた子供の見る世界がどう違って、親の心理はどう違うのか、考えてほしい。出会う親にも、自分たちの子どもの頃と今の子育てはどう違うのか、話す機会を作っほしい。この子がどんな風に暮らしているのか聞き、発達にどんな制限がかかっているのか。このような思考を持っていることが大切。

マニュアルや正解を教えてほしいというけれど、人間ほど正解がないものはない。「自分の体験から自分なりの正解の幅をとってものごとを考える」という思考を、私たちはどれくらい持っているのか。支援者の日常話す言葉の中に、思考は表れてくる。上から目線や、「〇〇すべき」という言葉遣いなど、子育て支援者の思考そのものは、お母さんたちにも伝わっていく。

地域でものごとを動かしていこうと思うと、子どもと親を、ずっと見ていくことになる。その中でいろいろなものが見えてきたとき、「どうしてあなたには見えないのか」とイライラしたり、「私たちはこんなに良いことをしているのに」と思ってしまうたりする。そんなときは、少し思考を変えてほしい。

向こうの立場になり、向こうの声を聞いたらどうだろう、というように。